

第五章 新しい豚の導入

訳注

本章ではいくつかの薬剤の使用に関する内容が含まれていますが、これらは2004年の米国での使用基準に沿って解説されているものです。日本と米国では薬剤の使用に関する法律や基準に違いがあり、それぞれの国で使用が認められている薬剤、そして一般によく使われる薬剤にも違いがあります。本書で解説されているものの中には、日本で認められていない薬剤や日本の使用基準にそぐわない内容のものもあります。しかし、米国の青少年の間で実践されている豚の育成計画というものをより深く理解するため、また本書の内容をできるだけ尊重するために、原文に忠実に翻訳しています。巻末に、本書に記載されている薬剤に関する情報を載せていますので、あわせて参考にしてください。また、病気に関することや薬剤の使用については、必ず獣医師との相談の上、決定するようにしてください。

ここで豚の育成中によくある失敗を紹介しようと思います。すでに悔しい思いをした私のお客さまを守るため、名前だけは変えてあります。

ジャックの失敗

ジャックは4-Hのメンバーの誰かが豚の育成計画で助けを求めた時にはすぐに飛んでいく、心の優しい親でした。彼は4-Hのメンバーが彼の息子と一緒に敷地内で豚を飼うことを快く許しました。私はいつもジャックの心の広さに感心していましたが、好意が不幸を呼ぶ場合もあったのです。

ジャックの豚舎は豚を飼うのにあまりお勧めの場所ではありませんでした。ただ地面の上に大きな豚房があるだけで、その周りが運動場になっていました。彼は敷地内にいつも豚や餌、物をぎゅうぎゅうに詰め込んでいました。そこには病気の豚を隔離したり新しい豚を検疫するためのスペースがありませんでした。換気に関しては、豚房の上に家庭用の扇風機が一つあるだけで、これはわずかに空気を掻き回す程度のものでした。地面は少しでも水を使うと滑りやすい泥になってしまうので、噴霧器を使う事ができませんでした。何とかするためにはジャックがショベルで敷き料を絶えずこまめに交換してやるしかありませんでした。

私が昨年春にジャックを訪問した時、彼は優しくするのはやめたと告白しました。彼は息子も含めて4人分の4-Hのメンバーの、7カ所の市場から集めた豚を15頭、一カ所にまとめて飼っていました。私が見た時の豚の状態は、2頭がすでに死亡して、7頭が下痢で病気、6頭が健康でした。死亡した2頭の病

理解剖ですぐに診断がつかしました。豚赤痢です（第九章参照）。

私はいろんなところから買って来た豚を混ぜるのは危ないと言いました。病気が計画的に予防されている農場から買った豚もいれば、運まかせのところから買った豚もあります。私はジャックに豚の健康状態や豚の販売元の衛生対策について確認したか尋ねると、彼はやっていないことを認めました。彼は豚が到着すると病気を防ぐ薬の入った餌を与えていて、その薬が全ての病気の問題を防いでくれることを願っていました。

ジャックは違った出所の豚を検疫もせず混ぜて飼うようになってから、運まかせのサンプルをしていたのです。新しい豚を群に混ぜる前には21～30日間の検疫が必要です。

その豚には信頼の置けるメーカーの配合飼料にカルバドックスを添加したものが与えられているはずでしたが、ジャックは2、3週間薬を使うと豚の調子が良くなったので、豚の能力をもっと引き出すために、別のショー用の餌に変えたと言いました。私はジャックにその餌の表示票を確かめるべきだと提案し、餌の貯蔵庫に調べに行きました。そこには4種類の餌があり、それぞれ違った抗菌性添加剤が含まれていましたがカルバドックスは使われていませんでした。

ジャックは買った餌にどんな薬が入っているかは知りませんでした。豚を最高の状態で育てなければならぬということにはわかっていた。彼は豚の調子が良くなるまで、違うものをいろいろ試すというやり方をしていました。私は彼にどうして治療や管理についてアドバイスを聞かなかったのか尋ねました。結局、私はこれ以上問題が大きくなるように電話で彼の手助けをすることにしました。彼は自分の餌の選び方には何の根拠もなかったことを認めました。彼が愛好家仲間と話し合った正しい餌を選ぶ方法が、実は間違っていた事を事実がしっかりと表しています。

カルバドックスの使用をやめても豚には問題が無くなったように見えました。もともと健康だった何頭かの豚は豚赤痢に対する免疫を獲得したようです。他の豚は薬で病気がコントロールできました。125ポンド（56.7kg）までの豚にはカルバドックスを使用し、それから出荷、もしくはショーに出品するまでの間は他の薬剤を選択します。カルバドックスは体重125ポンドまでの子豚には合法的に使用できます。病気を抑えるためには他の抗生物質を使う事もできます。薬を添加していない餌を使うと伝染病が発生することがあります。

ジャックが私に電話さえしていれば、多くの問題について話し合って被害を避けることができたでしょう。薬剤が適切に使用されているかをチェックしておけば、豚を無駄死にさせることもなかったのです。

PQA（米国豚肉品質保証協会）が豚の抗生物質の残留を抑制するためのプロ

グラムの解説書を発行しており、4-H や FFA の学生、その監督官には必ずそのプログラムを実践する事が義務付けられています。これには VCPR (獣医師-顧客-患者関係) についても解説されています(第六章参照)。薬剤は獣医師による診断の元に処方されるべきものです。4-H や FFA のメンバーは豚が病気をした時に診断や治療を頼める獣医師と関係を作っておかねばなりません。

ワクチネーション

ジャックはもう一つ、農場の PRRS の状態を把握していなかったのも、ここでも大きなリスクを抱えていました(第九章参照)。この病気は伝染力が強く、若い豚に深刻な肺炎を起こします。農場の PRRS の状態は販売者の獣医師に確認できます。第九章を参考にして PRRS のワクチンを使うべきかどうか良く検討し、理解してください。私はジャックと話し合い、マイコプラズマと豚インフルエンザのワクチンも使うよう提案しました。これらの病気に対するワクチンは、一緒に混ぜられた合剤が売られているので一度の注射(と2~4週間後の二回目の注射)で両方が済みます。私はかつて豚丹毒のワクチンはそれぞれが好みで打てばよいと考えていました。しかし、何ヶ所かのショーで私がこの病気を診断してからは、豚丹毒のワクチンの使用を強く勧めるようになりました。このワクチンは2~4週間おきに二回打たねばなりません。

その他のワクチン

他にも、特定の疾病問題がある時に使うとメリットの大きいワクチンがいくつかあります。これらの選択については獣医師とよく相談してください。ショーピッグを置いている農場の中にはまだ AR の問題を抱えているところがあります。もし AR の恐れがあるのなら(第九章参照)買った豚には2週間間隔で少なくとも2回ワクチンを使用しなければなりません。信頼の置ける研究によると、長期持続型のテトラサイクリンの注射も効果的なようです。

農場によっては App とヘモフィルス パラスイスの慢性的な問題を抱えているところがあります。獣医師に相談すればこれらのワクチンを使うべきか判断してくれるでしょう。連鎖球菌による膿瘍や髄膜炎の発生を経験した事があるのなら(第九章参照)連鎖球菌のワクチンの使用も検討すべきかもしれません。

豚を導入する時の処置

市場や他の農場から買った豚を農場に導入する時の対応は購入元の病気のリスクや輸送ストレス、あなたの豚舎の状況によって違います。これらのポイントを輸送前に獣医師に相談して判断してもらいましょう。ほとんどの重大な健康被害というものは、獣医師と連携した計画や対策によって防げます。私が担

当したりコンサルタントをした豚の育成家のほとんどが、豚を導入する時の対策にそれぞれ独自のやり方を持っていました。あるところでは餌に薬剤を添加して与えていましたが、飲水投与しているところもありました。これらで問題があったときには薬を注射してもいいでしょう。

駆虫、疥癬、シラミのコントロール

豚を導入する時には、必ず駆虫とシラミ取りを行なわなければなりません。様々な製品がありますが、一番あなたの豚に合ったものを獣医師に相談して決めてもらいましょう。バンミンスやセーフガードを使った継続的に行なう駆虫プログラムもあります。これらはシラミを抑える事ができないので、シラミの駆除剤も併用しなければなりません。タクティックは疥癬やダニもコントロールできる素晴らしい製品です。

寄生虫や疥癬の治療薬として、他にはアイボメックやエプリネックスなどの注射薬があります。これらはシラミに対しても素晴らしい効果を発揮します。持続的な投薬プログラムではなく、注射薬を短期間のスポットで使用する場合、投与期間以外は常に寄生虫の幼虫に暴露されるという欠点があります。

治療記録

豚の育成計画において最も重要な事の一つに、治療記録をつけるということがあげられます。この技術を身につけておくことは将来の生活にも役に立つでしょう。また、皆さんが養豚で仕事を続けようと考えているのなら、基本的に知っておかなければならない事でもあります。治療記録の記録法はPQA（米国豚肉品質保証）プログラムにくわしく記載されています。4-HクラブやFFAの食肉家畜部の会員は、全員がこの記録法を教育されます。この記録法の重要なポイントだけを以下に記します。

1. 治療した個体を識別し、追跡できるようにする。
2. 獣医師の指示に従う事。投薬前にラベルの表示の指示をよく読み、理解してその通りに使用する。
3. 全ての治療に対する記録を残し、一年間は保存する。
 - a. 個体の認証番号
 - b. 診断名
 - c. 使用した薬品名
 - d. 投与した量と回数
 - e. 投薬方法
 - f. 投薬量の目安としたおよその体重

g.投薬の担当者名

h.要指示薬の場合は処方した獣医師の名前

4 . 残留期間の確認。

餌の変更における注意点

新しい施設に豚を移した時に、子豚が下痢をするのは良くあることです。消化不良や下痢を防ぐため、新しい餌には徐々に慣らすようにします。子豚の生産者に頼んで豚が食べていた餌を少し譲ってもらい、新しい環境や餌に豚がなれるまで与えるようにしましょう。1~2 週間は慣らし期間として元の餌を混ぜて与えます。また、最初は餌にオートミールを 20% 添加し、手で混ぜて与えるのも良い方法です。もし手近にオートミールがない場合、食料品店で売られている『クエーカーオーツ』で代用する事もできます。小さな子豚は、はじめは餌をあまり食べないので、一度にあまりたくさんオートミールを買う必要はありません。豚に最初から目一杯の餌を食べさせないようにしましょう。2~3 週間かけて増やすのがベストなやり方です。

環境

ショーに向けて豚の育成を始めるためには、春先に子豚を購入しなければなりません。しかし、この時期は子豚にとってはまだ寒い時期です。たっぷりと敷き料を与え、子豚が穴を掘ってベッドを作れるようにしてあげましょう。床材が網やスノコであった場合、3 平方フィート (0.3 平方メートル) 以上の面積のゴムマットの上にヒートランプを吊るします。ヒートランプは火災の原因にもなるので細心の注意をしてください。

気温と湿度が高くなってきたら、扇風機や噴霧器を使った冷却装置を早めに動かしましょう。